

WHAT IS SAPEUR? 貧しくも世界一エレガントなコンゴの男たち

影嶋裕一 祥伝社 2015年12月

おやさと研究所准教授

森 洋明 Yomei Mori

80年代後半、私がコンゴ共和国に住んでいたときのことである。首都ブラザビルの郊外の住宅街を歩いていると、前方からスーツにネクタイ、革靴に帽子、手にはステッキ、口にはパイプといった姿の初老男性がやってきた。日差しのきつい厳しい暑さの昼下がりがだった。彼の姿を見て即座に「この暑いのにどうしてまた……」という同情心がわき起こった。そしてまた、ヨーロッパ風の紳士的な衣装と砂地にゴミが散乱する住宅街の雰囲気とがあまりにもかけ離れていて、その大きなミスマッチがとても印象的だった。

当時、住宅街では破れた服を着た子供たちが裸足で走り回っていた。崩れかけたブロック塀にトタンで囲まれただけのトイレ、電気や水道もなく、住宅街の小道は、乾季には砂浜のようになり砂埃が舞い、雨季にはいたるところに水たまりができ、泥が跳ね上がった。その住宅街に突如現れたファッション雑誌から飛び出したようなヨーロッパ風紳士を見て、一種のカルチャーショックを受けた場面だった。そしてその当時は、それがこの本で紹介されている「サプール」だとはまったく知らなかった。

本書は、2014年12月4日にNHKの「地球イチバン」でコンゴの「サプール」と呼ばれる人を特集した番組の内容に則したものである。アフリカに行ったことのない著者が、番組のプロデューサーからネットでみつけたサプールの話を聞き興味をもった。しかし、アフリカで「ただおしゃれな男たちがいる」だけでは番組としてなりたない。どのようにすれば「地球イチバン」という番組に相応しいものになるのか？ そこで「世界一服にお金をかける男たち」という番組のサブタイトルとなった。

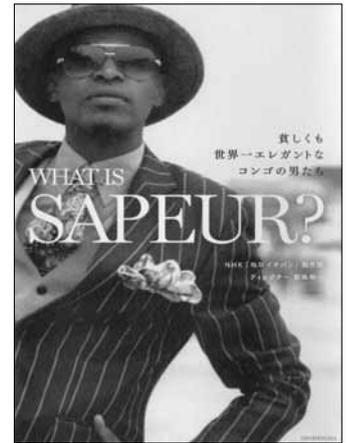
「サプール」とは「サップ」(SAPE: Société des Ambianceurs et des personnes élégantes: おしゃれで優雅な紳士たち)と呼ばれることばから派生した造語で、この「サップ」を実践する人を指し、コンゴ社会に定着している表現である。

サプールは「平和の象徴にもなっている」(10頁)と紹介されている。とくに、90年代の内戦以降はその性格がより顕著に出てきたようだ。実際「90年代以前のサプールは、今のようにならないうちに世間に受け入れられていたわけではない。」(26頁)とあるように、平和の象徴としてサプールが脚光を浴びようになったのは内戦という悲劇を経験したことが大きく影響した。「軍靴の音ではなく、ブランドの音を響かせる」(28頁)ことがサプールの役目であり、「非暴力運動でもある」(116頁)と言う。「サプールと戦争は対極にあります。共存などできません」と、内戦を生き抜いたサプールのことばは一層のリアリティをもって受け入れられる。

サプールたちは8月15日のコンゴの独立記念日にも参加する。彼らの行進では多くの人の注目を浴び、日本の歌舞伎よろしく見栄をきる彼らの一挙手一投足に歓声が沸く。全国に生中継されるなかで、彼らの動きが社会にも浸透していくのだろう。

「ルールを守り、暴力を振るわない。いつも誰かに見られているから、背筋も伸びて老け込まない」(22頁)、あるいは「外見だけ良くてもダメなんだ。内面も綺麗じゃないといけない」(20頁)とサプールたちは言う。単にエレガントを極めたり、

おしゃれにお金をかけるだけではなく、サプールには着飾った衣装に相応しい内面性も問われてくる。また、ファッションとは「厳しい日常に差し込む一筋の光」とも捉えられている。物質的に貧しいなかで、超一流のファッションを着こなす姿は人々に夢を与える。私が住宅街で周辺の「貧しさ」の風景とミスマッチに感じたことにこそ、サプールが持つ



大きなメッセージが込められていたのだ。サプールに接して「豊かさとは何か？」と自身に問いかけた著者は「己の生き方を信じて貫いた先に見える『希望』」(31頁)だと感じ取った。

また、このサプールを通じて、コンゴの物作りに対する考え方も垣間見ることができる。「もし、『メイド・イン・コンゴ』のファッションブランドができたなら、そこに労働市場も生まれる」(29頁)と言うことばには、ヨーロッパのブランドからやがてオリジナルブランドへの挑戦が感じられる。しかしその一方で、「こと『ものづくり』においては、『自分たちには到底作れない』と勝手に決めつけている」(30頁)と指摘されているように、物作りの文化が育ってこなかった社会も浮き彫りになっている。「我々には材料もあるし、有り余ほどの人材もいる。しかしコンゴ人はコンゴ製を信じない。優れた製品は外国製のものにしかないと信じているからだ。自国の製品を生産し、消費しない限り決してコンゴは発展しない」(30頁)。平和の象徴であるサプールのこのことばから、さらに「発展」というキーワードもサプールに加えられるように思える。

本書には、たくさんのサプールの姿がカラー写真で掲載されている。また後半部では、サプールたちの私生活も紹介されている。彼らの職業は、電気工事士やカフェ経営、公務員などさまざま。月収も格別に高いというわけではない。それでも服にかかる金額は、生活費を遙かに超えるもので、まさに「世界一服にお金をかける男たち」なのである。私の知り合いのコンゴ人にもサプールと称する人がいる。彼の仕事は交通の取り締まりをする警察官。休日にはとてつもないおしゃれな装いをし、人が変わったように見える。今度彼に会ったとき、いくらかけているのか聞いてみようと思う。

大学で担当するアフリカ文化に関する講義のなかで、このサプールの存在を紹介し、映像を通じてサプールの姿を見てもらった。学生からは「貧しさのなかにこんな人たちがいるのは信じられない」や「おしゃれすることが平和の象徴になるのは素晴らしい」といった声が多く聞かれた。日本のアフリカに対するイメージは、「戦争」や「飢餓」「貧困」「感染症」など、全体的に負の側面が強調されてしまう。しかし、アフリカに関するこのような本が、コンゴ社会においてサプールたちがそうであるように、日本におけるマイナスのアフリカ観に「暗闇を照らす明かりのような存在」(24頁)の一つになればと願う。